

共感的理解の視点を持った生徒との関わり

— 日頃の教師の関わり方を振り返る —

カウンセラー研究員 戸石 賢二（川崎市立平間中学校）

I 主題設定の理由

私はこれまでの勤務校において生徒指導担当の立場として、生徒間や教師への暴力的行為、校外での法に触れるような反社会的な問題行動といった様々な状況と関わってきた。こうした様々な生徒指導上の問題に対応する中で、教師と生徒との信頼関係が築けなかった点もあったのではないかとの見地から、教師が生徒と信頼関係を構築することを目的に、学校全体で生徒を受容し、傾聴から思いや困り感を把握し、よりよい学校生活を送るためには何が必要なのかを考え実行するようになってきた。そして本校において、学校経営方針に則り、目指す子ども像である「意欲的に学習に向かえる子」を育てるために、学校全体で授業力向上に取り組んだ。このような地道な取組が功を奏したのか、また、社会を取り巻く現状も少しずつ様変わりしてきたためなのか、3年前より、こうした反社会的な問題行動に対応する場面は減少し、学校全体が落ち着いてきた。その結果、生徒が主体的に活動する雰囲気や基盤が整ってきた。

しかし、この1、2年の本校の現状を振り返ってみると、教師の生徒や保護者への関わり方において、生徒への指導や保護者への説明といった対応がうまくいかず、生徒や保護者に不信感をもたれてしまったケースが何回も起きている。『生徒指導提要』（文部科学省）には、生徒指導の積極的な意義として、「目前の問題行動に対応するだけでなく、一人一人の児童生徒の健全な成長を促し、自己指導能力を育成することを目指す」ことがうたわれている。そして、「児童生徒の積極的な活動が展開されていくためには、深い児童生徒理解と相互の信頼関係を前提とした生徒指導の充実が不可欠」とある。つまり、本校では積極的な活動を展開するために不可欠な相互の信頼関係が十分に築けていない場合もまだまだあると考えられる。

そこで、今回の研究では、本校の学校経営方針に掲げる目指す子ども像である「豊かな人間関係を築ける子」を育てるために、教員が自らの言動を振り返り、共感的理解の視点を持って生徒と関わり、生徒一人一人の理解の深化を図るためにはどうしたらよいかについて考えることにした。つまり、教師が生徒との間に信頼関係を築くために、どのような関わり方をすることが好ましいのかを探ることとした。そのために、まず生徒の声に耳を傾け、次に、問題と思われる事例を分析し、分析した結果から、教師が自らの言動を振り返り、適切に対応するにはどうしたらよいか、具体的な手立てを考えるために、主題を設定した。

II 研究の内容

1 これまでの生徒との関わり方を振り返る

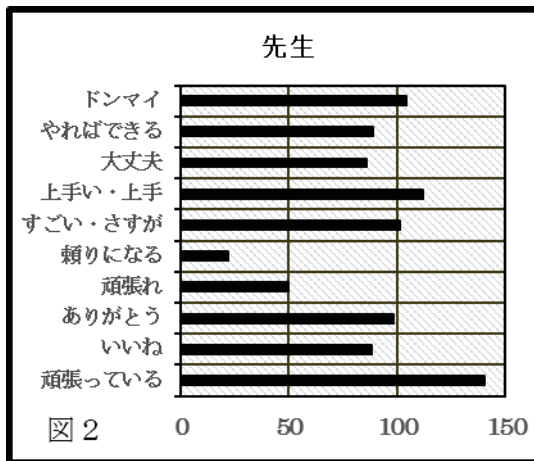
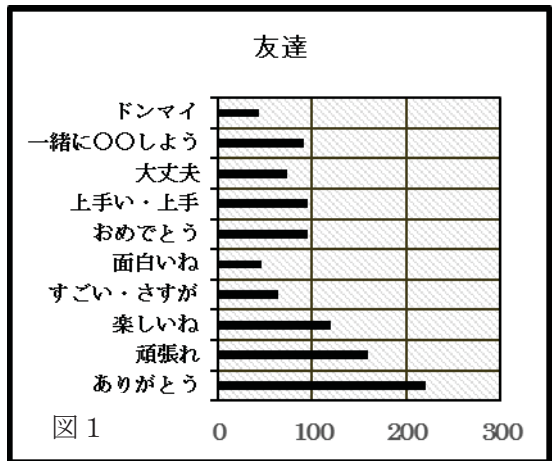
(1) 「うれしい言葉」「いやな言葉」「うれしい・いやな行為」などに関するアンケート実施（6月）

教師が「生徒と信頼関係を築く」ためには、どのような関わり方がよいのかを知ることから始めることにした。そこで、本校の生徒が友達や教師の言葉かけについてどう感じているのかを調べるため

にアンケートを作成し、全学年の生徒に無記名で実施した。(385名回答)

設問は、川崎市立中学校長会で3年ごとに行われている「人権教育推進に係る調査」の項目である「人(先生・友達)に言われてうれしい言葉・いやな言葉」に加えて、「先生との関わり」とした。(言葉については選択式、関わりは記述式で具体的に記入)

①「うれしい言葉・いやな言葉のアンケート集計結果」から読み取れたもの



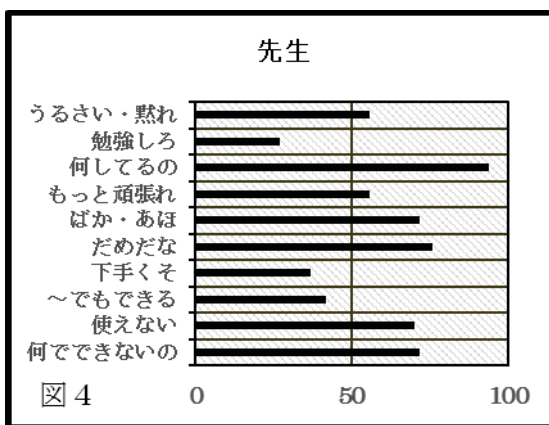
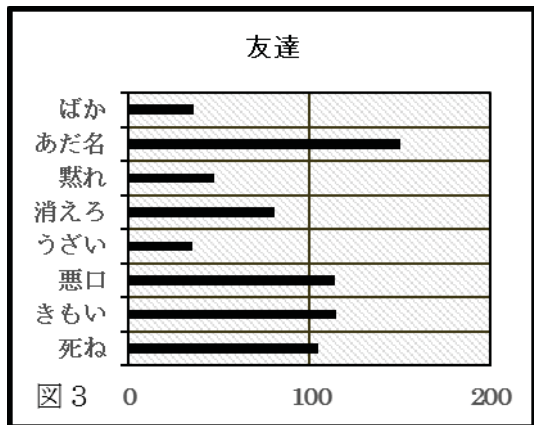
横軸:人数

図1 「友達に言われてうれしい言葉」

図2 「先生に言われてうれしい言葉」

友達からの声かけ(図1)においては、感謝をされる(「ありがとう」とうれしいということがどの学年の結果からも読み取ることができた。また、励まし(「頑張れ」)や認められる(「上手い・上手」)声かけも、うれしいことが分かった。

先生からの声かけ(図2)に関しては、認められる(「頑張っている」「上手い・上手」)ことがうれしく、「大丈夫」「ドンマイ」など気にかけてくれることも求めていることが分かった。



横軸:人数

図3 「友達に言われていやな言葉」

図4 「先生に言われていやな言葉」

友達からの声かけ(図3)においては、不本意な「あだ名」を挙げるものが多かった。また「死ね」「きもい」「悪口」が多いのは、友達に対して普段から使っているからではないかと考えられる。

先生からの声かけ(図4)に関しては、「何でこんなこともできないの」「何してるの」といった非難や批判的な言葉に対して嫌悪感をもっていると考えられる。

②「先生にされて、うれしかった・いやだった行為のアンケート集計結果」から読み取れたもの

生徒が感じる「先生にしてもらってうれしい行為」は、「褒められる」「認められる」「目をかけてくれる・気にしてくれる」というものであった。こうした回答は、質問事項「先生に言われてうれしい(うれしかった)言葉は何ですか」にあるものから生徒が想起したと思われる。実際に「してもらっ

た行為」として具体的な記述はほとんどなかった。

それに対して、生徒が感じる「先生にされていやな行為」は、善岡の分類項目¹にあたる具体的な記述のものが多く、こうした行為をされた生徒の心に、いかに大きく残っているのかということを考えさせられた。

多く見られた項目

(誤解による叱責) (きつい叱り方) (言い分を聞かない叱り方) (自尊心を傷つけられた)
(弱点の指摘、皮肉、悪口を言う) (兄弟や他の生徒との比較) (不用意な発言) (教師らしくない態度や行動)
(教師として望みしからざる態度や行動を見て)

(2) 「うれしい言葉」「いやな言葉」に関するアンケートの振り返りの実施 (7月)

6月に行ったアンケートの結果の中で、「自分が友達に言われてうれしい」言葉を他の人に使っているか、また、「自分が言われていやな」言葉を他の人に使っていないかを投げかけるために、アンケート結果を生徒に提示し、振り返る機会をもった。今回に関しては、振り返りを行う意義を伝える際の言葉かけを同一にするために、私が所属する3年生にのみ実施し、川崎市立中学校長会の「人権教育推進に係る調査」の項目についてだけ提示した。生徒の振り返りとして次のようなものが挙げられた。

(うれしい言葉) 自分が言われて嬉しいことは、相手もそうだから使えるようにしたい。(3年男子)

(いやな言葉) 私は死ねとか軽い気持ちで言うから今後、気をつけようと思う。(3年女子)

また、「先生に関する言葉」として図2、4を提示したところ、「うれしい言葉」をかけてほしいという生徒が多かった。そして、「いやな言葉」はほとんど言われたことがないという生徒も一部はいるものの、「よく聞く」「よく言われる」という記述が大半であった。

(3) アンケート集計結果を教員で振り返る (7月)

生徒が思っていることを率直に書いた今回の結果を、7月の授業最終日に、時間をとって全教員に開示した。そこから、夏休みに行われる部活動を始め、今後の教師としての振る舞いに生かせるよう、振り返りを記述式で行った。

教員の振り返り (一部)

- 信頼関係の構築が第一である。生徒の存在価値を認め、自尊感情を高められる言葉かけを心がけたい。
- 生徒は、小学校1年から先生を見ているある意味プロである。その意味で、私たち一人ひとり比較されている。
- 日常からの関係が大切だ。日常の関係づくりも、一方的なものではなく、生徒の言葉や態度などに注意を払い、一つ一つを丁寧に考えていかなければいけない。
- 教師も一人の人間として、大人として、生徒に接する時の態度や言葉かけを考えていかなければならない。身近にいる大人として、私たち教師は手本になる言葉を使っていきたい。生徒の気持ちに寄り添えるようにしていきたい。クラスでも、折に触れて指導していきたい。

おおむね真摯に受け止めているように感じられる振り返りであったが、すべての教員が「自分の事」として自覚して、実際の言動につなげなければならない。そこで、生徒、保護者との間に信頼関係を築くためにはさらなる手立てが必要だと考えた。

(4) 生徒や保護者への対応事例を分析する (7月～8月)

具体的に問題と思われる日頃の教師の関わり方を考えるために、事例をジャンル別に10例用意し、こうした事例はなぜ起こるのか、考えられる問題点を分析することで、教師のよりよい対応を探る研

¹善岡宏「子どもに及ぼす教師のひとことの影響 (I)」長崎大学教育学部教育科学研究報告 第47号 63-70 (1994年6月)「Table3 児童・生徒にマイナスの影響を及ぼした教師の言動と回答者数およびパーセント」の分類項目

修を行うことにした。

事例の内容（○番号は事例番号）

- ①生徒間トラブル ②いじめ ③部活動 ④生徒への指導 ⑤生徒・保護者への言葉かけ
⑥生徒・保護者への対応に関するもの ⑦不登校生徒への初期対応 ⑧不登校生徒・保護者への対応
⑨不登校生徒の進路指導対応 ⑩地域からの電話

研修では、これらの事例を分析し、適切でない教師の対応として多く見られることを考えさせた。出てきた問題点を多い順に並べると、次のようになった。

- ①教師の都合・言い訳 ②信頼関係を作れていない ③不適切な言葉かけ
④適切ではない指導 ⑤相手の立場にたって行動しない
⑥決めつけ・思いこみ ⑦部活動での不適切な指導 ⑧手を抜く・楽をする ⑨普段からの目配り
⑩力による支配 ⑪チームとして機能していない ⑫居場所作りができていない ⑬社会人としてのマナーの欠如
（●番号は問題点の多い順番を示す。同数字のものは、問題点の数が同じであったことを示している）

事例の中に見られる教師の問題のある行動は、生徒から取ったアンケートに見られる「先生にされていやな（いやだった）言葉・行為」と一致していることが分かってきた。

2 教員集団として生徒・保護者への適切な対応を身に付ける

（1）「信頼関係を築くための気づき」のグループワーク（9月）

7月に行った教員の個人の振り返りを見ると、信頼関係を築くための関わりの捉え方にばらつきがある。そこで教員集団として互いを高め合うことで、生徒・保護者とよりよい関係づくりについて理解できるだろうと考え、生徒指導研修をグループワーク形式で行うことにした。このグループワークにおいて、学校全体で「生徒への関わり」と「保護者への対応」の行動目標をつくることにした。また、同時に「今日からできる」個人行動目標を教員がそれぞれ立てるようにした。グループワークは、次のように行った。

- (1) グループは各学年2名くらいずつの6名前後のものを5～6グループ作る。（年代・学年の枠を外す）
- (2) 「アンケート結果を見ての教員の振り返り（7月実施のもの）」に見られる「よい言動」「課題」を提示。（生徒によるうれしい行為・いやな行為も再提示）
- (3) それを読んで、何でこうした事態が起こってしまうのかを考える。
- (4) その上で具体的にどうした行動をとったらよいかを話し合う。
- (5) グループごとに「自分たちの行動目標」を立てる。
☆生徒への関わり ☆保護者への対応
具体的にどうした点に気をつけたらよいか。
各グループでそれぞれ3つずつ目標を立てる。
※目標となる例を、いくつか挙げておく。
「謝罪は今日行けば誠意。明日行けば言い訳」 「電話では事実のみ。感想は言わない」
「傾聴 人の話は最後まできちんと聴く」など
※具体的に目標を立てるように確認する。 「丁寧な関わり」× →どう丁寧にするか
「きめ細かく」× →何をどのように
- (6) グループごとの「行動目標」を発表し、共有する。
- (7) グループワークを行っての感想並びに「自分の行動目標3か条」を書いてもらう。
- (8) 各自で書いた後に、グループで、各自の書いた内容を全員が声に出して発表し合い、共有する。



教員の個人行動目標の多くは、「言葉かけに関するもの」「人との接し方」「注意すべき点」「保護者への対応」となった。どうしても抽象的な目標になってしまう教員が多かった。しかし、自らの行動を振り返ることで、これからの1人1人の目標を具体化する流れにつながった。

教員による個人行動目標（一部）

「言葉かけに関するもの」

・丁寧な言葉かけを心がける。・感情的にならず生徒が具体的な行動を取れるような言葉かけを心がける。

「人との接し方」

・あいさつ・多くの生徒に声をかけ、できるだけ普段からの関係をつくっておく。
 ・よい所、できている（できる）所をはっきり伝える。
 ・生徒や保護者との信頼関係の確立（日頃からの声かけ、傾聴、学校からの発行物など..）

「注意すべき点」

・注意する時は、「どうすれば解決するのか（よくなるか）」が分かるように。
 ・信頼関係第一!! 信頼関係がなければ何事もよい方向にはいかない。・円滑な教員間の人間関係

「保護者への対応」

・親の立場を尊重し、同じ方向で指導ができるようにする。・保護者へ普段からこまめに連絡する。

（2）学校としての標語を作る（10月）

グループ・個人が作成した行動目標をもとに共通した認識を共有するために、学校として教員集団が一丸となって取り組める目標＝標語を作ることにした。話し合いで出てきたものを、生徒指導担当としてまとめ、管理職と確認をして生徒・保護者に関して、次のように、それぞれ3つずつ作った。

生徒への関わり	保護者への対応
<p>ほめて育てる（認めて高まる自己肯定感） 言葉で育てる（相手の立場や心情を考えた言葉かけを） 心を育てる（感情的な指導は、心に届かない）</p>	<p>学校 100 : 1、家 1 : 1（大切なひとりの人間として対応を） まずは受容（相談や困り感がある保護者の声に耳を傾けよう） 主体は共通（よりよくしたい気持ちは一緒だから同じ方向性で）</p>

この標語は職員会議で教員に伝え、学校としての行動目標として意識していけるようにした。

（3）見えてきた2つの課題

9月に行ったグループワークにおいては、「行動目標の作成検討を行ってみて、再確認したことや新たに意識しなければいけないと感じたことがありました。」という感想を持った教員がいたように、全体的に、生徒や保護者との関わりについて再確認や振り返る機会となっていた。しかし、同時に、次のような感想・振り返りが見られた。

「研修をやった時は新鮮な気持ちでいられるが、日を追うごとに忘れてしまいがちになる」
 「落ち着いてくると、生徒への接し方が雑になる」

こうした振り返りを通して、次の2つの課題が浮かび上がってきた。

- 課題①「だんだん日にちが経つにつれ教員としての心がけ、すなわち適切な対応を忘れてしまう。」
 課題②「慣れてくるに従い、適切な対応が丁寧でなくなり、雑になりがちである。」

こういったことを、日々忘れずに行っていかななくてはならないことを考えると、言わば、「ここがゴールではなく、むしろ始まり」と捉えて、見えてきた課題に対して今からできる次の2点を実行してみてもどうだろうか考えた。

①「標語を教員の目に触れるようにする」(課題①の解決策)(11月～)

10月に教員に伝えた標語であるが、作っただけでは意味がない。話し合いの中で、教員集団として意見が一致したせっかくの「心構え」である。その時だけにはせず、何らかの形で定期的に教員に提示したいと考えた。

そこで、今回は、職員会議において学校長が作成する「職員会議校長メモ」の最初に掲載し、全教員の目に月に1回は目に入るようにした。同時に職員会議の情報交換の生徒指導担当の話の最初にも確認の意味で伝えるようにした。

②「定期的に生徒指導研修を行う」(課題②の解決策)(11月)

時間が経つにつれて、人はどうしても現状に慣れてしまうのは否めない。そこで、11月には「大阪市教育センター 一休罰・暴力行為を許さない開かれた学校づくりのために」より体罰の事例と、私が作成した対応事例(Ⅱ-1-(4)参照)から「⑤生徒・保護者への言葉かけ」を使って、より適切な対応を身に付けることを目的とした事例検討を行った。

(1)グループは各学年2名くらいずつの6名前後のものを5～6グループ作る。(年代・学年の枠を外す)

(2)共通事例「体罰に関するもの」と選択事例「生徒・保護者への言葉かけに関するもの」を読んで、「事例から考える点」として、次の①～③についてグループで話し合う。



①事例の問題はどこにあるのか。(問題点の分析)

②こうした時に、事例に出てくる人たちは、それぞれ、どのように感じていると思うか。(当事者の立場に立つ)

③具体的にどうしたらよいか。(適切な対応を探る)

(3)グループごとの見とりを発表し、共有する。



(4)グループワークを行っての感想並びに前回の研修時に立てた

「自分の行動目標3か条」の実践状況を振り返る。前回不参加の教員は、新たに行動目標を立てる。

(5)各自で書いた後に、グループで、各自の書いた内容を発表し合い、共有する。

その際は、全員が発表(声に出す)をする。

教員による研修を受けての感想・振り返り(一部)

- 事例も、日常ありふれた内容で、つい見過ごしがちなことを共有して考えられ、よい機会となった。他の意見を吸収する柔軟さと、正しいと思ったことを貫く意志、表現方法を持ちつづけられる集団でいたい。
- 何気ない事例のように感じても、視点を変えることで、問題点や改善点があることがよく分かった。また、グループ討議を行うことで、各先生の発言が生徒の声として聞くことができ、より実感を得て考えることができると思った。
- 自分の視点だけでなく、多角的な意見を吸収できて良かった。
- 1つの事例を多面的に見ることで、指導の方向性がいろいろと見い出せてよかった。

また、この研修において、前回の研修時に立てた「自分の行動目標3か条」を提示し、数か月経った中、自分の実践状況を振り返ったところ、次のような記述が見られた。

太字は、前回立てた行動目標(一部)

「**具体的な行動を促す言葉かけ**」部活動の指導で心がけています。うまくいっているかどうかは分かりませんが…。前回の研修のおかげです。ありがとうございます。

「**前向きな声かけで信頼関係を築く。**」前向きな声かけは、今のこの時期もっと必要だと思うので、もっとできるようにしていきたいです。

「**生徒に具体的な行動を促せる言葉かけをする。**」以前よりは言葉かけに気を配るようにしています。

このように、継続して提示していくことで、慣れて雑になることを防ぐ一助にはなったと考えられる。また、次のように、自らの行動を見つめ直すきっかけにもなったようである。

完璧にやれている…とは言えないが、自分にできる限りのことはやっけてきているつもりである。しかし…そうであっても、生徒のためによりよく関わるところや、改善すべき点はあるはずなので、9月～10月でやってきたことから、次の11月からは反省と見つめ直しを行っていきたい。

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究から学んだもの

本研究では、本校の目指す子ども像である「豊かな人間関係を築ける子」を育てるために一人一人の教員が自らの言動を振り返り、教員集団として生徒や保護者と信頼関係を築く手立てを考えることを主眼にした。まずは学校の現状を知るために、全校生徒にアンケートを実施し、彼らがどのように考えているかを捉えた。そして、生徒にも、自分たちの言動を振り返らせるようにした。同時に教員にも実際の自分たちの言動がどのように生徒から捉えられているかを提示し、振り返る機会を持った。次に、すべての教員が「自分のこと」として捉えるために、どういう行動が問題点として考えられるか、実際の事例から分析した。そうすることで、教員は自分の都合ではなく、一人一人の生徒の立場に立って指導をしていくことが大切であるということを理解した。つまり、教員が共感的理解の視点を持って生徒・保護者との関係をよりよくしようとして行動することで互いの信頼関係が生まれ、生徒が安心して学校生活を送り、成長することにつながるのだということを経験することができた。

また、教員一人一人が意識して行動することが大切であるが、教員集団として対応を学び、身に付けることがより効果があるのではないかと考えた。それには学校がチームとして信頼を構築する取組を行うことが必要となる。そこで、グループワークなどの研修を通じて、「お互いをチェックし合うと同時に高めていくことができる」という形をとることとした。生徒・保護者は様々な活動やつながりを各教員と持っている。それぞれの生徒が楽しく学校生活を送るためには、担任や学年の教員、養護教諭や部活動の顧問がそれぞれの場面で適切に対応する必要性があることをあらためて認識することができた。

今回の研究を通して、生徒と信頼関係を築くには、相手を認め、感情的にならずに、相手の立場や気持ちを考えた声かけをすることが大切であることを、また保護者に対しても、相談や困っていることを受け入れ、一緒に取り組んでいくことが信頼関係を築くことにつながることに、教員集団として気づくことができた。こうした教員集団としての取組は、12月に全校生徒に改めて実施したアンケートの結果にも反映されたといえよう。第1回のアンケートから半年経った現在、「この間に先生にしてもらってうれしかったこと（行為）はありましたか。」「この間に先生にされていやだったこと（行為）はありましたか。」という質問項目を設けたが、「いやだった言動」として生徒から出てきた数は、図5のように大きく減少していた。さらに、我々教員の間でも、生徒への関わりがやわらかくなったり、他者の意見に耳を傾けるようになるなど、「互いを認め合える」職場の雰囲気になってきた。

このように、教員が1人ではなく「集団＝チーム」として自らを振り返り、共通認識を持って生徒や保護者と関わることで、より適切な対応をとることができるようになるということを経験することができた。

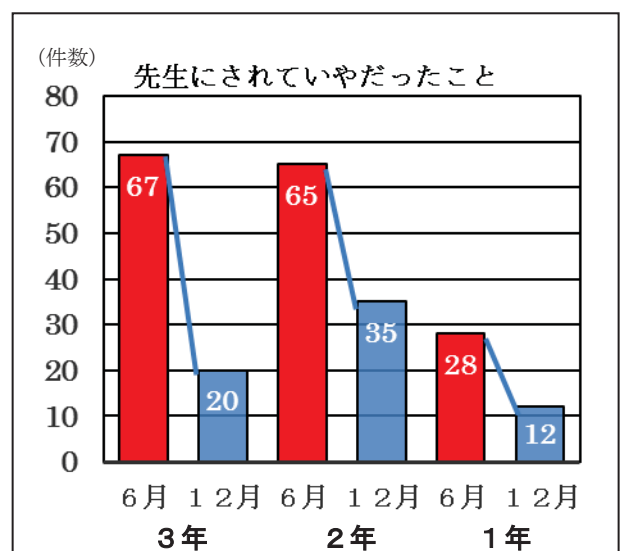


図5 「いやだった行為」の数の推移

2 今後の課題

本研究は、生徒が安心して学校生活を送り、健やかに成長をするために、「一人一人の教員が自らの言動を振り返り、生徒や保護者と信頼関係を築く手立てを身につけるためにはどうしたらよいのか」を探ることが目的であった。しかし、まだ十分とは言えず、これからも具体的な改善策を考えていく余地がある。

例えば、12月のアンケートの中には、「書いても教員の言動は変わらないので、書かない。」という生徒の言葉があった。また、「特になし」という回答も多く見られ、こうした回答をした生徒が、どのように思っているのかを捉えるためには、普段から共感的理解の視点に立って生徒に接することで見取る必要がある。また、一つの手段として、定期的にアンケートを行い、継続的に確認していきたい。

様々な経験を持つ教師で構成したグループ研修を通して、我々は学びと気づきがあり、生徒・保護者との間に信頼関係を築く一つの手立てを学ぶことができてきた。このような変容が見られたのは、教員集団として互いに補完し合うことができたからだと考える。個々の教師ではなく学校として、子どもをよりよくすることが重要であると感じている。すなわち、チームとして教師がお互いを高め合うと同時に、各自のよい所を認め合い、共有し、子どもたちの成長につなげることのできる集団を目指していくことができるとよいのではなかろうか。「ほめて育つ」のは決して子どもだけではない。「言葉で心を互いに育てる」教師集団でありたいと思う。

最後に、このような研究の機会を与えてくださったことに感謝するとともに、適切なお指導とご助言をいただきました川崎市総合教育センターの皆様、及び勤務校の中村敦校長先生はじめ職員の皆様に心より感謝し厚くお礼申し上げます。

【参考文献】

善岡宏『子どもに及ぼす教師のひとことの影響（I）』

長崎大学教育学部教育科学研究報告 第47号 1994年

河合隼雄『こころの処方箋』

新潮社 1998年

桑原知子『教室で生かすカウンセリング・マインド』

日本評論社 1999年

『生徒指導提要』

文部科学省 2010年

篠原清昭『学校改善マネジメント 課題解決への実践的アプローチ』

ミネルヴァ書房 2012年

津村俊充『プロセス・エデュケーション 学びを支援するファシリテーションの理論と実際』

金子書房 2012年

『ケーススタディによる校内研修の手引』

体罰・暴力行為を許さない開かれた学校づくりのために』

大阪市教育センター 2014年

桑原知子『教室で生かすカウンセリング・アプローチ』

日本評論社 2016年

ドロシー・ロー・ノルト レイチャル・ハリス 石井千春訳

『子どもが育つ魔法の言葉100～世界中の親が共感した子育ての知恵～』PHP研究所 2016年

【指導助言者】

川崎市総合教育センター指導主事

板橋美由紀